鳥形木製品について

森田孝一

1. 白石例に関して

山口市白石所在の山口大学教育学部附属山口小学校構内白石遺跡の調査において鳥形木製品が出土した。出土状況・形状等については本文第8章を参照されたい。本例は後述する池上例や纒向例などに比べて写実性に劣り、鳥形と認定するにあたっては若干躊躇したが、検出状況により杆（竿）を共伴ししかも組み合わさっている可能性が高く、民族例では杆に付け翳すものは鳥以外一般の動物では認められない点から、また日本各地で鳥形と称しているものの中には本例よりもより簡略化されたものもあること、さらに鳥形と杆との装着方法についても池上例をはじめ民族例に多くの具体例があるように鳥形の腹部に杆をつきさすものとは異なり、本例は鳥形の尾部と杆を組み合わせたものであるが、この点では北シベリア、イェニセイ河の東域にあるドルガン地方に伝わるシャーマンの鳥杆の中に類似例がみられる[1)]ことなどを傍証とした。

本例の検出状況をみるに、現民族例の鳥杆の場合、鳥形は杆頭の先端ないしはその近くにつけられているが、本例は鳥形の背部が加工木の枘穴からの両端距離における長身の方に向いていたが、これは流失（廃棄）し埋没する際に自然的な要因で反転したのではないかと察している。また、杆との組み合わせ方法については、鳥形の尾部が挾まっていた部分は凹状になっており、装着にあたっては紐状のもので縛り固定したとも考えられる（腹部後方の突起は杆との装着を意図して作られたとも推測される）。しかし、腐蝕のため確証を得ないが、本来は穿孔穴の可能性もあり、尾部を差し込んでいたとも推測される（尾部が極度に小さいのはそのためかとも考える）。さらにこの場合、尾部の中央にある穿孔に小棒状のものを挿入しストッパーとして固定していたとも一つの憶測ができる。

本例の性格としては、溝状遺構（SD１）の機能・性格が現段階明確に把握できないため断定し得ないが、農具や生活用具と共に検出されたこと、若干時期は異なるが近傍で住居跡が見つかっていることも勘案すれば、葬送儀礼よりも農耕儀礼、集落祭祀に係わった蓋然性が高いと思われる。時期は共伴土器から古墳時代初頭の可能性が高く、より遡っても弥生時代終末である。

2. 既出例について

国内において弥生時代から古墳時代における鳥形木製品は、これまで西日本各地で出土しており、報告者が鳥形木製品と称しているものは今回の例を含めてTab.22で示す通り現在15遺跡31例におよぶ。これら鳥形の形状はバラエティに富み、写実的なものからかなり簡略化しているものまであり、鳥形と認めるには躊躇するものも含まれている。また作りも丸彫、板状、棒状とさまざまで、さらに被装着物との組み合わせが考えられるもの、そうでないものなどいくつかのタイプに分けられよう。

池上遺跡（大阪府和泉市）[2)]

6点出土しており、その内3（Fig.105，4）を除いた5点はほぼ完形品で、いずれも溝内出土である。報告書では作りの上から、丸彫りのものと板を切り抜いた扁平なものに分類し、1～3（Fig.105，2～4）を第Ⅰ型式、4～6（Fig.105，5～7）を第Ⅱ型式としている。

1－池上例のうち最も大きいもので、かなり写実的なつくりである。腹部には杆を挿入すると考えられる孔が穿たれている他、背部に別木作りの翼を組み合わせるためと推察する切り欠きがある。また胴－側面に斜め方向の溝、胴部の尾部寄りに上下貫通する方孔も有する。さらに尾の先端には鋸歯状の切り込みを施した痕跡が残る。(Fig.105，2)

2－全体に細身で、腹部には1と同様な孔を穿つ。頭部、胴部の一部、尾に朱彩が認められる。(Fig.105，3)

3－頭部から胴部の破片で、腹部に径2cmほどの不整円形を呈する浅い凹みを穿つ。(Fig.105，4)

4－板状のもので、比較的成形も丁寧であり、周縁の稜を面取りしており、とくに頭部から頸部にかけては丸味をもたせ、立体感を出している。背部に切り欠きが有する。(Fig.105，5)

5－頭部先端には嘴が明瞭に表現されている。尾部下面に細長い二孔を穿つ。また頭部一面に浅い削り込みがあり、目を表現した可能性もある。(Fig.105，6)

6－屈曲をもつ樹枝を用いたもので、他の池上例に比べると粗雑なつくりである。腹部下面に極めて浅い削り込みを認める。(Fig.105，7)

瓜生堂遺跡（大阪府東大阪市）[3)]

1－頭部から胴部にかけて現存するもので、頭部は極めて立体感をもって作られており、嘴、目が表現されている。(Fig.105，9)

2－板材の両端に三角形状の頭部と先細りの尾部を削り出すという簡粗なつくりである。(Fig.105，10)

3－尾部を欠損する。頭部は丸く、頸部は比較的細長い。(Fig.105，8)

山賀遺跡（大阪府東大阪市[4]）

1－頭部は直線的にのびる頸部に連続し、先端下には斜下方に短く屈曲する口先を表現した突起がつく。背部、腹部は丸みをもつ。尾部先端は欠損する。頭部より尾部？まで小孔が貫通し、喉部では表面に現われ溝状を呈する。(Fig.105，11)

2－直線的細長い形状で、頭部と胴部さらに尾部を区別するためと察する全周の削り込みが二カ所に施されている。尾部は先細りとなる。(Fig.105，12)

巨摩遺跡（大阪府東大阪市[5]）

5点ある。頭部を作り出した棒状のもので、尾部は斜めに短く切断したもの、長く削ったもの、大きく屈曲するものがある。木取りは丸棒のままと割截材の両者がある。

これらはいずれも鳥形としては他例に比べてかなり簡略化されて表現しているもので、他の遺跡では有頭棒状木製品として紹介している類似品もある。とくに半損品の場合、鳥形と判断するのは非常に困難と考える。(Fig.105，13～17)

亀井北遺跡（大阪府八尾市[6]）

1点出土。丸彫製でかなり写実的な秀品である。頭部には冠羽か鶏冠を表現した突起があり、胴下部には方形の枘穴を有する。

纒向遺跡（奈良県桜井市[7]）

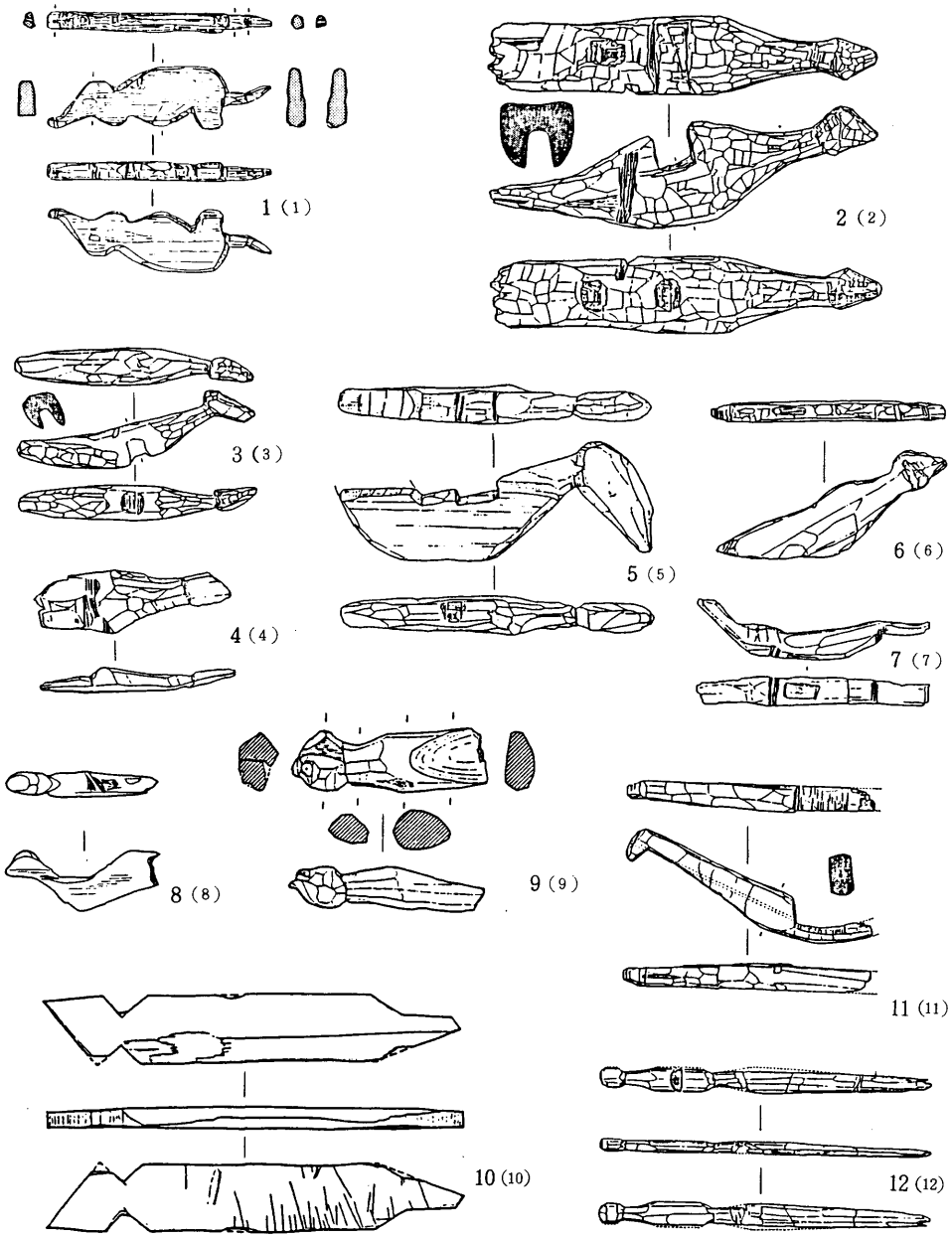
1－板状のもので、鶏を表現する。安定感のある胴部から細い頸を作りだし、頭部に至ってはその上部に鶏冠を削り出している。その鶏冠の中央に半円形の孔を施しており、報告者はここに紐等を通して器体を吊したのではないかと考えている。胴部、鶏冠部分に朱彩がある。(Fig.105，19)

2－欠損部分が多いが、形体的に1と酷似するもので、大きさもほぼ同じと思われる。胴部に朱彩有り。(Fig.105，18)

3－一木作りで、胴部上面は大きく刳込みがあり、容器にもなる。また胴部下面は平坦でこれ自体安定して置くことができる。側面からみると体部には木理が羽状に見られ、水上に浮いた水鳥を髣髴させるとしている。(Fig.105，20)

石見遺跡（奈良県磯城郡三宅町[8]）

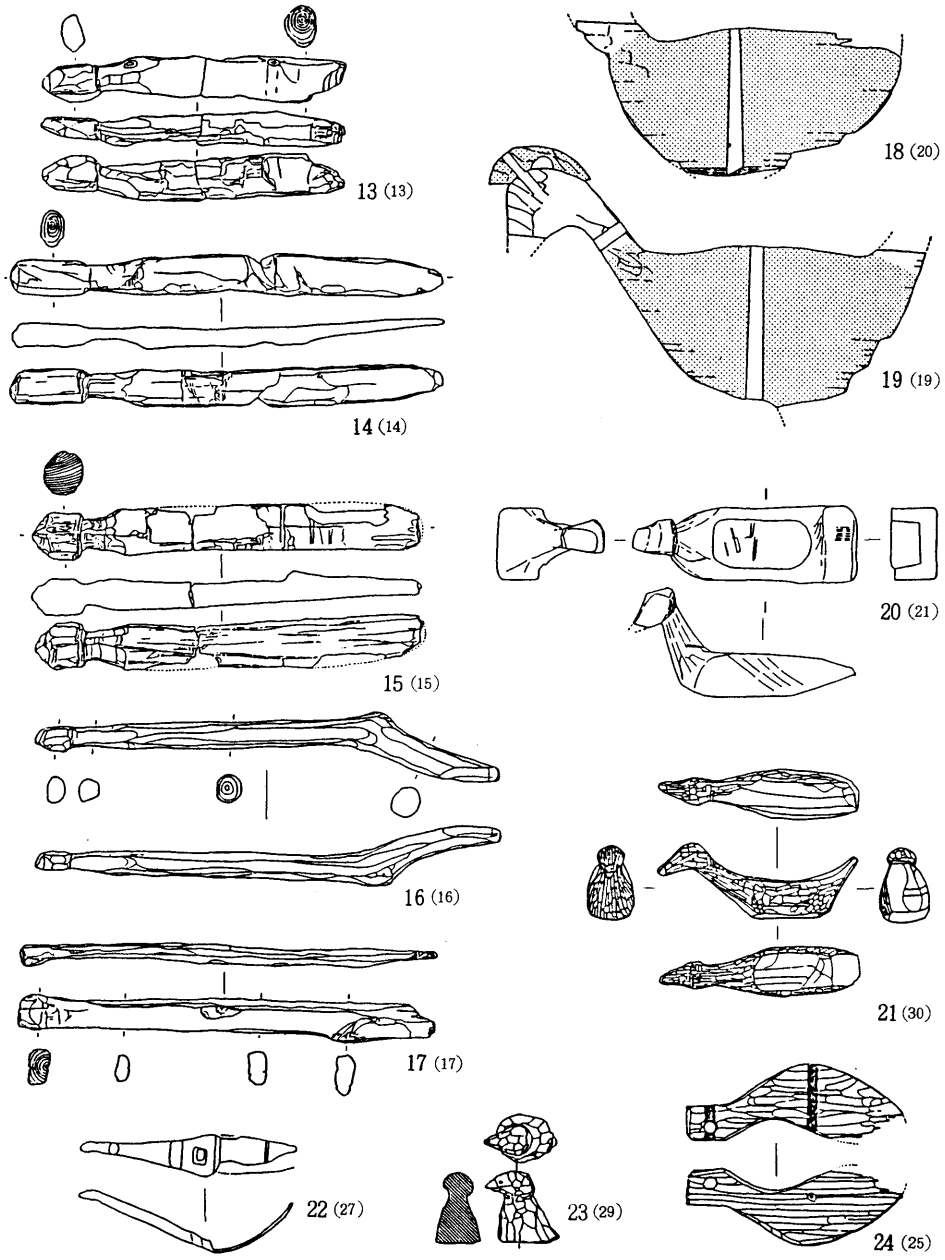
2点出土。両者とも頭部・胴部・尾部からなり、胴部に方形の貫通孔を有する。



1　白石遺跡　　2～7　池上遺跡　　8～10　瓜生堂遺跡

11・12　山賀遺跡

Fig.105　各遺跡出土鳥形木製品



13～17　巨摩遺跡　　18～20　纏向遺跡　　21　詫田西分貝塚

22　西川津遺跡　　23　宮ケ久保遺跡　　24　長越遺跡

※（　）内の番号はTab.22のNo.

Tab.22　鳥形木製品（弥生～古墳）出土地名表

No.	遺跡名	所在地	法量（cm）			樹種	出土地点	時期	備考
			全長	胴幅	厚				
1	白石	山口	19.25	5.4	1.7		溝状遺構	弥生終末～古墳前期初頭	
2	池上	大阪	33.7	7.7	6.6	ヒノキ	溝	弥生中期(第Ⅱ様式)	報告書 W-001
3	池上	大阪	20.5	3.4	3.1		溝	弥生中期（第Ⅲ～Ⅳ様式）	報告書 W-002
4	池上	大阪	(17.0)	(2.2)	5.4		溝	弥生中期（第Ⅲ～Ⅳ様式）	報告書 W-003
5	池上	大阪	(26.5)	(6.8)	3.3	シイノキ	溝	弥生中期(第Ⅱ様式)	報告書 W-004
6	池上	大阪	21.2	5.2	1.6	ヒノキ	溝	弥生中期(第Ⅱ様式)	報告書 W-005
7	池上	大阪	(21.2)	2.6	2.5		溝	弥生中期(第Ⅱ様式)	報告書 W-006
8	瓜生堂	大阪	13.5		約2		包含層	弥生中期	報告書 W-11
9	瓜生堂	大阪	★(約17)	★約5			包含層	弥生後期か	報告書 W-70
10	瓜生堂	大阪	36.0	5.9	1.9	ヒノキ	包含層	弥生後期後半	報告書 W-73
11	山賀	大阪	22.7	3.6	2.0	ヤマフジ？	溝	弥生前期中葉	
12	山賀	大阪	★約29				溝	弥生前期中葉	
13	巨摩	大阪	★約30			ユズリハ	沼状遺構	弥生中期末～後期前半	報告書 第81図-1
14	巨摩	大阪	★約38			シイノキ	沼状遺構	弥生中期末～後期前半	第81図-2
15	巨摩	大阪	★約35			シイノキ	沼状遺構	弥生中期末～後期前半	第81図-3
16	巨摩	大阪	★約36			サカキ	沼状遺構	弥生中期末～後期前半	第82図-1（有頭状）
17	巨摩	大阪	★約40			アカメガシワ	沼状遺構	弥生中期末～後期前半	第82図-2（有頭状）
18	亀井北	大阪	25.6	7.8		コウヤマキ	自然流路	弥生中期	
19	纒向	奈良	39.0	13.9	0.8－1.5	ヒノキ	古墳の周濠	古墳前期	
20	纒向	奈良	(28.0)	12.7	0.8－1.4	ヒノキ	古墳の周濠	古墳前期	
21	纒向	奈良	19.4	6.6		ヒノキ	土壙	古墳前期	(鳥舟形容器)
22	石見	奈良					溝	古墳後期	
23	石見	奈良					溝	古墳後期	
24	深草	京都						弥生中期(第Ⅱ様式)	
25	長越	兵庫	(18.3)	6.3	0.8	ヒノキ	大溝	古墳前期	
26	伊場	静岡	23.5				大溝	古墳後期　6世紀中葉～7世紀前半	
27	西川津	島根	22.5	7.3	2.0				縄文～古墳包含層出土
28	西川津	島根	(17)	5.5	1.3			弥生中期後半	
29	宮ケ久保	山口	高さ6.0			広葉樹	溝	弥生中期中葉	
30	詫田西分貝塚	佐賀	17.3	4.2	胴部高 3.2		井戸	弥生中期前葉～中葉	
31	狐塚法勝寺	滋賀	19.5	5.5	3.4		古墳の周濠	6世紀初め	

（注）法量★は報告書記載実測図より測定　（ ）内の数値は現存値

深草遺跡（京都市伏見区）[9]

1点出土。

長越遺跡（兵庫県姫路市）[10]

板付のもので、頭部は方形を呈しており、直径1cmの孔を穿ち目を表現し、また先端下部に浅い切り込み、細く面取りをして嘴を表わしている。腹部に被装着物を組み合わせたと推察される穿孔がある。(Fig.105, 24)

伊場遺跡（静岡県浜松市）[11]

板状のもので、報告者は嘴と胴上部を欠損するため、鳥形と断定しがたいと前置しながらも頭部の形状が水鳥を表現しているとしている。

西川津遺跡（島根県西川津町）[12]

2点出土。1－頭部は亀頭状に削り出し、それより頸部から胴部にかけて二等辺三角形状を呈する。胴部には長方形の孔が穿たれている。形態的に山賀1に近似する。(Fig.105, 22)　2－板状のものである。

宮ケ久保遺跡（山口県阿東町）[13]

小型のもので、頭部から胴部を造作しており、下部は平らである。嘴は尖り、頭部両側に目が表現されている。(Fig.105, 23)

詫田西分貝塚（佐賀県千代田町）[14]

立体感をもつもので、かなり写実的である。頭部から胴部側面にかけ丁寧な細かい整形がなされている。腹部下面は平坦で安定して置ける。(Fig.105, 21)

狐塚法勝寺遺跡（滋賀県近江町）[15]

1点出土。

3. 鳥杆習俗（霊鳥信仰）について

弥生時代から古墳時代にかけての鳥形木製品の出土例を上げたが、これらの中には形態から鳥杆としてではなく容器や置物として用いられたと推定しうるものもある。なお、鳥形の木製品は奈良時代から平安時代にかけての遺跡からも出土する。しかし、金子裕之氏[16]によるとこの時期の多くのものは馬形、人形、陽物などと同様に木製模造品の範疇に属するもので、これらの模造品の成立背景には、律令的祭祀の具体的内容を記録した『延喜式』の祭料記載とを比較した際にいくつかの共通項目が見い出される点から、国家祭祀政策すなわち律令的祭祀との関係を察しており、弥生から古墳時代にかけての鳥形木製品とは性

格上大きく異なるものである。

現在の鳥杆習俗は、朝鮮半島、北アジア、東南アジアの広い範囲に見うけられ、鳥杆は村や寺院の入口、墓小屋、水田の中、時には独立した場所に立てられている。中でもシベリアのエベンキ人のシャーマンテント[17]やタイ北部のアカ族の門[18]などはよく知られ、またそれらの霊魂観も様々である。日本でも対馬[19]や鳥取県[20]などで葬送儀礼に関連して見られる。

日本での鳥杆習俗は、鳥形木製品が弥生時代前期まで遡るものがあり、弥生時代の範疇のものは出土地点からみて葬送用具ではなく、集落の農耕祭祀に関係があるとし、この時代の初めに朝鮮半島より農業神と結びつき、稲作技術とともに日本へ伝播したと考えられる。また、『魏志東夷伝』馬韓の条に記述されている「蘇塗」は農耕儀礼を行なう祭場であるとともに、神杆すなわち鳥杆であったとする説[21]もある。他に銅鐸との関係も指摘されている[22]。

さらに、古墳時代に至っては、金関恕氏によると[23]弥生時代において鳥の霊力が穀霊運搬者として発揮されていたものの、この時代になると鳥の霊力は主として死霊運搬者として葬送儀礼に移行していくとの見解を出している。白鳥伝説、天若日子物語などの神話や古墳の壁画に鳥船が描かれていることもその背景を看取するものとし、鳥形木製品に関しても古墳時代のものでは纒向遺跡や狐塚法勝寺遺跡では古墳の周濠から出土しており、葬送儀礼との結びつきが窺われるようになる。また、現在日本でみられる鳥杆習俗例は墓上施設に設けられるもので、これらは古墳時代からの霊鳥信仰を継承しているものかもしれない。なお、古墳時代以降の霊鳥信仰について国分直一氏は[24]北方シャーマニズムの流れをくむ天的祭儀を主体とするものとしてととのえられたと考えている。ただし、国分氏はつけ加えて現在にのこる風鎮祭の例を上げ蘇塗系信仰は必ずしも一様に展開したわけではなかったかもしれないと述べている。

筆者は、霊鳥信仰が弥生時代から古墳時代にかけて、農耕儀礼から葬送儀礼にすべて移行したとは考えられず、古墳時代以降においても農耕儀礼の中で霊鳥信仰が引きつがれていったと考えている。それは今回の白石例を初め、長越遺跡でも古墳時代に至る可能性をもつ鳥形木製品が葬送儀礼の場というよりもより集落に関連すると予想される遺構から出土していることや、古墳時代前期の纒向遺跡の水鳥形木製品（Fig.105，20）についても石野博信氏[25]がそれを出土した土壙の性格を農耕儀礼のものと考えていること、また6世紀初頭を中心とする時期と考えられている石見遺跡においても石野氏[26]はその祭祀性格を古墳に伴うものではなく、農耕儀礼、とくに治水関係の祭祀の可能性が強いとしていること、

さらに福岡市の拾六町ツイジ遺跡[27]では奈良時代末から平安時代初期にかけての水田遺構面から鳥形木製品が検出していることなど古墳時代以降でも葬送儀礼に関する場所以外で鳥形木製品が出土する例もあることからである。

また民族学の見地から考えると、穀物起源伝承の一形式に「穂落神」と称するものがあり、その中で鳥が稲をもたらしたとする伝説や昔話は沖縄から東北に至る広い範囲に分布している。その伝承の一部は少くとも古事記や日本書紀などの時代まで遡るものがあると考えられている。穂落神伝承は、朝鮮半島や中国、東南アジアにも存在しており、東南アジアの一部の地域においては水稲耕作に先行する焼畑穀物栽培、元来は粟類の栽培と結びついていると考えられているが、日本では東南アジアの多くの地域と同様、稲作と結びついて登場するといわれている。さらに、穂落神話に対応する農耕儀礼の一つに「鳥勧請」というものがあり、分布は全国的で、起源は田植の発達以前の水稲栽培と結びついていたと推定されている。鳥勧請の具体例を挙げると、埼玉県のある村では〝鳥の口〟と称するものがあり、年頭にあたり半紙に鳥の姿を描いて粥箸に挟み田の水口に立て、そして焼米を進ぜ、その上に榛名神社の<嵐除>の御礼を挟んだ六尺ばかりの竹竿を立てるという[28]鳥杆の名残りかと思わせるものもある。

さらにまた現在の鳥杆習俗において、朝鮮半島の江原道の例[29]はジプテペギー城隍という神竿の竿頭に三羽（ところにより一羽の場合もある）の木鴨をのせた神木が田んぼの中に立てられており、農耕儀礼との関係を示唆している。他、文献史料においても807年、忌部広成の撰でまとめた書である『古語拾遺』の神話で農事を占う巫が「志止々鳥」という鳥の名であらわれる[30]。

このように古墳時代以降、後世においても鳥と農耕との結びつきを示唆するものも多くある。弥生時代からあった鳥杆習俗すなわち霊鳥信仰は、古墳時代になって葬送儀礼との結びつきが強く看取されるものの、農耕との結びつきにおいても、後世漸次的に鳥杆そのものは見られなくなるが、穂落神や鳥勧請などとしての農耕祭儀の中で生きづいていると思われる。三品彰英氏が『古代祭政と穀霊信仰』の中で、種子・穀霊・祖霊という融即的な結びつきから、農耕儀礼が死者に関する儀礼と切り離せないこと、すなわち収穫祭は祖霊祭でもあることを論じられている[31]ことに関連して、少なくとも古墳時代以降は霊鳥信仰の対象となる霊魂観も多面的におよんで農耕、葬送、大地儀礼など各種の祭祀儀礼と結びついていったと推察する。

〔注〕

1）ウノ・ハルヴァ著　田中克彦訳『シャーマニズム－アルタイ系諸民族の世界像－』（P.487、104図、1971年）。
2）江谷寛「鳥形木彫」（『池上・四ツ池』 第2阪和国道内遺跡調査会、1970年）。
（財）大阪文化財センター（『池上遺跡第4分冊の2木器編』（1978年）。
3）（財）大阪文化財センター『瓜生堂』（1980年）。および大阪府教育委員会の藤沢真依御教示。
4）大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター『山賀（その2）』（1983年）。
5）（財）大阪文化財センター『巨摩・瓜生堂』（1982年）。
6）（財）大阪文化財センターの赤木克視氏御教示。
7）橿原考古学研究所『纒向』（1976年）。
8）奈良県立橿原考古学研究所附属考古博物館『古代人のいのり』（1977年）。
9）注2）に同じ。
10）兵庫県教育委員会『播磨・長越遺跡－本文編－』（1978年）。
11）浜松市教育委員会『伊場遺跡遺物編1』（1978年）。
12）島根県教育委員会『西川津遺跡発掘調査報告書』（1980年）。ジャパン通信社『月刊文化財発掘情報』1985.10（1985年）。
13）中村徹也「木製動物群と土器に陽飾された動物文」（『考古学雑誌』65－3、1979年）。
14）佐賀県千代田町教育委員会『詫田西分貝塚高志神社遺跡』（1983年）。
15）ジャパン通信社『月刊文化財発掘出土情報』 1985.7（1985年）。
16）金子裕之「古代の木製模造品」（『研究論集』Ⅵ、奈良国立文化財研究所、1980年）。
17）金関恕「前方後円墳の起源」（『展望アジアの考古学』樋口隆康教授退官記念論集、1983年）。
18）鳥越憲三郎『原弥生人の渡来』（1982年）。
19）立平進「死者の鳥」（『考古学ジャーナル』 166、1979年）。
20）金関恕「神を招く鳥」（『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集、1982年）。
21）注20）に同じ。
22）金関恕「考古学から観た古事記の歌謡」（『天理大学学報』西谷真治教授還暦記念論集、1985年）。
23）注20）に同じ。
24）國分直一「弥生社会と蘇塗系信仰　古代日韓関係の一面を窺う」（月刊『韓国文化』№45、6月号．1983、1983年）。
25）石野博信『古墳文化出現期の研究』（1985年）。
26）注25）に同じ。石野氏はさらに石見遺跡の祭祀儀礼について、中国・朝鮮の天的祭儀を思想的背景としていると推測している。
なお、金関恕氏は上記注22）の文献中で石見遺跡について、墳丘の削平された古墳であろうと想定している。
27）福岡市教育委員会『拾六町ツイジ遺跡』（1983年）。
28）大林太良『稲作の神話』（1973年）。
29）金両基「朝鮮古代信仰史入門」（『古代朝鮮の歴史と文化』、1975年）、（「信仰と習俗からみた相似点」『古代日本と朝鮮文化』、1979年）。
30）森貞次郎「弥生時代の遺物にあらわれた信仰の形態」（『神道考古学講座』第1巻前神道期、1983年）。
31）萩原秀三郎「よみがえり－再生の観念」（『よみがえり』、1977年）。

＜付記＞

小稿は昭和59年5月の山口考古学談話会および同年12月の九州史学会で発表したものをまとめ、加筆したものである。なお、鳥形木製品は近年ますます増加しており、筆者は今後もさらにこれに関する資料を収集し検討し、改めて論じたいと思っている。

白石遺跡発掘調査現地説明会において梅光女学院大学教授國分直一先生にはたいへんお世話になりました。また資料収集に関して赤木克視、藤沢真依、阿部幸一、白井忠雄氏らの御協力を頂いた。記して厚くお礼申し上げます。